

明治時代の京都市幼稚園における手技

—京都市立柳池幼稚園の保育案を中心に—

清原みさ子

はじめに

本論集第55号では、京都市学校歴史博物館に残されている城巽幼稚園の保育案等の資料から、明治時代に手技でどのようなことが取り上げられていたのかを明らかにした。ここでは、同博物館に残されている柳池幼稚園の「保育按」「保育案」から、手技でどのようなことが取り上げられていたのか明らかにした上で、城巽幼稚園の手技との比較検討をしたい。

1. 保育案の様式と概要

(1) 残されている資料の概要

京都市学校歴史博物館には、柳池幼稚園の明治32（1899）年度の「二ノ組保育按」と、明治33年度「二ノ組保育案」「一ノ組保育案」、明治34年度の「一ノ組保育案」が残されている¹⁾。『日本幼児保育史』には、明治32年度の「三之組保育案」²⁾も紹介されているが、同博物館にはそれにあたるものは残っていない。同書には、明治33年度の「二ノ組保育案」の手技は取り上げられていない。そこで、ここでは、京都市学校歴史博物館に残されている4つの保育案を中心に、適宜、他の資料を加えながら、検討を進める。

4つの保育案は、すべて1年分残されているわけではない。明治32年度の「二ノ組保育按」は、5月8日から翌年の3月28日まで、翌年度の「二ノ組保育案」は、4月9日から日付が記入されていないが3月27日と思われる日まで、1年分残されている。同年度の「一ノ組保育案」は、4月9日から3月9日まで、明治34年度の「一ノ組保育案」は5月6日から3月15日の週末までのものが残されている。

この間の全部の日に記入されているわけではなくて、無記入の日もある。明

治34年度の「一ノ組保育案」では、2月に1週間全部無記入の時があるが、他の案でも無記入の日がある。

(2) 保育案の様式

明治32年度だけは、1枚に月曜日から土曜日までの6日分が記されている。他は3日分ずつなので、欄の広さが倍になり、たくさん書けるようになっている。どの案でも「説話」「作法」「手技」「唱歌」「遊嬉」が取り上げられていて、「手技」の欄が一番広い。手技の中で行なう細工と題目が記入されている。

欄が広ければ、多くのことを記入できるわけだが、「作法」「唱歌」「遊嬉」は大部分が題目のみで、変わりがない。「説話」は題目だけでなく、話の筋が書かれ詳しくなっている。「手技」は図が描かれている割合が高くなり説明が詳しくなっているときもある。その様式は、以下のようである。

按 育 保 日 三 月 十 日 自 週 八 十 二 第 組 ノ 二						
土	日	水	木	火	月	既
水曜と同じ	復習	午前・夜物・復習	復習	朝・夕・夜物・復習	朝・夕・夜物・復習	既
全	全	全	全	全	全	作
工豆細	摺紙 隨意	摺紙 隨意	摺紙 隨意	摺紙 隨意	摺紙 隨意	法
鳥井ノ刺シム	山ノ林ノム	壺ヲ縫ハム	壺ヲ縫ハム	壺ヲ縫ハム	壺ヲ縫ハム	手
日は早山	桃太郎	桃太郎	桃太郎	桃太郎	桃太郎	技
	右全	右全	右全	右全	右全	唱
						歌
						遊
						嬉

明治32年度「二ノ組」

日 四 二 月 全 至 日 九 十 月 一 十 自 週 第 組 ノ			
水	火	月	既
水	火	月	既
全	全	全	作
排箸環	織紙	木積	法
石階ヲ見	ニヨラ織ラム	社及ニ	手
復習ヲス	復習ヲス	復習ヲス	技
復習ヲス	復習ヲス	復習ヲス	唱
			歌
			遊
			嬉

明治33年度「二ノ組」

2. 取り上げられている細工と頻度

(1) 「二ノ組」の場合

明治32年度には、「積木」「摺紙」「箸排」「板排」「貼紙」「画方」「織紙」「豆細工」「縫取」が取り上げられている。基本的に、木曜日と土曜日以外は毎日、2種類の細工が行なわれるようになっている。月曜日が「板排」と「貼紙」、火曜日が「積木」と「織紙」、水曜日が「画方」と「摺紙」、木曜日が「縫取」、金曜日が「箸排」と「摺紙」、土曜日が「豆細工」である。「摺紙」だけは週2回になっている。これが基本であるが、日によっては1種類しか行なわれなかったこともあり、記入されている日数は同じではない。記入されている日数は、「積木」は35日、「摺紙」は73日、「箸排」は38日、「板排」は35日、「貼紙」は34日、「画方」は40日、「織紙」は36日、「豆細工」は19日、「縫取」は46日である。木曜日の「縫取」の残りを、しばしば土曜日に行なうようになっている、そのため「豆細工」の日数が少なくなっている。

明治33年度の方には、時間表が載っている。ここでは、「積木」「摺紙」「環排」「箸排」「板排」「貼紙」「織紙」「画方」「豆細工」の9種類の細工が取り上げられ、土曜日を除いて毎日、2種類ずつ割り当てられている。「積木」と「貼紙」は週2回で、他は1回ずつである。だが、保育案を見ていくと、この時間表通りにはなっていない。環と箸を一緒に並べる時に「環箸排」という言い方も使われているし、「剪纸」という言葉も使われている。「縫取」は3回、「粘土細工」も4回取り上げられている。

回数は、4月の第一週のみ土曜日以外は一日2回であるが、その後は週2日は2回、あとは1回になっている。6月4日からは、一日1回になっている。そのため、明治32年度と比べると、4月からの案が残されていたにもかかわらず、日数が少なくなっている細工が多い。「積木」は36日、「摺紙」は31日、「環排」は8日、「環箸排」は15日、「箸排」は17日、「板排」は27日、「貼紙」は13日、「剪纸」は2日、「画方」は30日、「織紙」は26日になっている。「豆細工」は前年度より多くて、22日になっている。特に「摺紙」と「貼紙」は半分以下に減っている。

(2) 「一ノ組」の場合

明治33年度の保育案では、「二ノ組」と同様、保育時間表がついている。それをみると、「積木」「摺紙」「板排」「貼紙」「画方」「織紙」「箸排」「縫取」「豆細工」が取り上げられている。「積木」と「摺紙」が週2回のほかは1回ずつである。保育案の内容を見ていくと、「積木」「摺紙」「箸排」「板排」「貼紙」「画方」「織紙」「豆細工」「縫取」「粘土細工」「つなぎ方」が取り上げられている。時間表上は、土曜日以外は一日2回、2種類の細工が行なわれるようになっている。4月9日から6月2日までは時間表と同様であるが、6月4日からは「二ノ組」と同じく、一日1回になっている。

記入されている日数は、「積木」34日、「摺紙」43日、「箸排」23日、「板排」19日、「貼紙」21日、「画方」22日、「織紙」22日、「豆細工」21日、「縫取」23日、「粘土細工」5日、「つなぎ方」1日である。

明治34年度の保育案では、「積木」「摺紙」「環箸排」「板排」「貼紙」「画方」「織紙」「豆細工」「縫取」が取り上げられている。一日1回で、ほぼ毎週取り上げられている細工と、隔週のものがある。ここでも、前年度に取り上げられていた「粘土細工」は、5回みられる。

5月6日からしか残されていないので、当然ながら前年度より記入されている日数は少ないが、「画方」だけは27日で多くなっている。「積木」は24日、「摺紙」は22日、「環箸排」は19日、「板排」は10日、「貼紙」は11日、「織紙」は17日、「豆細工」は15日、「縫取」は6日分に、記入されている。

3. 恩物を用いた手技の内容

(1) 「二ノ組」の場合

まず「積木」であるが、明治32年度、33年度に35日分と36日分記入されていて、前の「復習」がそれぞれ7回と10回、「随意」や「工夫」が5回と7回である。これを引いた23回と19回に具体的な題目が記されている。

明治32年度には、「家」「門」「橋」「軍艦」「相撲ノ土俵」「宮」「舟」「花壇」「庭ノ景色」「井戸」「八幡宮」「肘突及ビ杯」「二重門」「犬小屋」「ヘツツイニ水桶」等が記されている。これらの題目は、「説話」で取り上げられている話に

関連したものが多い。「花咲爺」の話をしている時の「家」のところでは、「爺サンノ住ム所ノ家ヲ教フ」と記されている。また、「大江山」の話のところでは、「頼光ノ鬼退治ニ出陣ノ時武運長寿ヲ祈リタル八幡宮ヲ作ラシム」と書かれている。

明治33年度には、「馬部屋」「洞穴」「橋」「井戸」「池」「家」「土俵」「鳥居及び社」「社及び石階」「寝台」「龍宮ノ御殿」「龍殿門」「雁ノ居リシ池」等が、題目として記入されている。ここでも、前年度同様、「説話」で取り上げられている話に関連した題目が多い。「馬部屋」の時の「説話」は、「乗馬ト驟馬ノ話」である。昔話の時も、「金太郎ノ棲ル家」や「奈良ノ興福寺」というように、話に出てくるものが取り上げられている。

「箸排」「環箸排」「環排」ではどのような題目があげられているのであろうか。明治32年度は「箸排」であるが、いくつか記されている図をみると、必要に応じて環もいっしょに用いるようになっている。「梅ノ花」「鉢」「箱」「家」「舟」「門」「打出ノ小槌」「植木鉢」「鳥籠」「紋形」「奴」「刀」「山」「犬ノ住家」「馬ノくら」「碗」等が記されている。ここでも、「積木」と同様、「説話」で取り上げられている話と関連した題目がみられる。例をあげると、「桃太郎」のところで、「桃太郎ノ乗り行ク舟」、「舌切雀」で「竹ニテナシタル雀ノ門ヲ排ベシム」となっている。

明治33年度には、「クツハ」「菓子パン」「斧」「水呑」「柿」「壺」「植木鉢置」「首輪及鈴」「らんぷ」「野原ノ草木ノ様」「龍王居間ノ襖」等が、あげられている。ここでも、前年度同様、「説話」と関連した題目がみられ、長い説明文が付けられている場合もある。例えば、「一寸法師」のところで、「一寸法師ガ都へ上レル道スガラ浮ベシ碗ノ舟ニ箸ノ權アリテ川水ニ浮ベル様」となっていて、図も描かれている。

では、「板排」の題目は、どのようなものがあげられているのであろうか。明治32年度には、「鉢」「土俵」「燈籠」「橋」「籠」「住家」「カブト」「盆」「屏風」「教会ノ家」「鳥籠」等が、取り上げられている。やはり「説話」での話と関連した題目がみられる。「桃太郎」のところでは、「婆サンノ洗だくニ行キタル川ニ橋ありテ其下ニ舟ガ浮ビ居ルナリ」³⁾となっている。「金太郎」のところでは

「土俵」、「廻り燈籠」のところでは「貼紙ト同ジ燈籠ヲ排ベシム」と、書かれている。

明治33年度には、「狼ノ棲家」「牛小屋」「橋」「山」「労働者ノ家」「神社」「箱」「龍宮殿」等の題目が、記入されている。同様に、「説話」と関連した題目がみられる。「説話」の「牛ノ庶物」のところで「牛小屋」を並べるようになっている。「瘤取り」の話の間に、「三角四枚四角二枚ヲアタヘテ翁ノ家ヨリ遠山が見ユル様ニ排ヘシム」ことが、取り上げられている。

(2) 「一ノ組」の場合

「二ノ組」と比べると、「復習」が少ない。「随意」「工夫」が占める割合は、明治33年度は「一ノ組」も「二ノ組」もほぼ同じくらいであり、明治34年度も同じくらいになっている。この年度は一年分なかったので、具体的な題目の記入は、33年度の「一ノ組」の方が多い。

まず「積木」であるが、明治33年には「田舎ノ家」「橋」「宮」「馬車」「燈台」「三階ノ家」「学校」「鶴吉ノ墓標」「酒盛ノ道具」「百姓ノ家」「城ノ門」「寺ノ門」等が、取り上げられている。ここでも「二ノ組」と同様、「説話」のところで取り上げられている話に関連した題目が多い。「牛若丸ノ每晚笛ヲ吹キナガラ五条ノ橋ニ行キタル其橋ヲ積マシム」という記述が見られるし、「燈台ノ話」のところでは「燈台ヲ積マシム」となっている。

明治34年度は5月6日からということと、「復習」や「随意」が多いこともあり、具体的な題目は少ない。「神社ト鳥居」「家」「机ト椅子」「井戸」等があげられている。「説話」の「忠義ナル犬ノ話」のところでは、そこに登場する二人である「太郎ト阿花ガ学校又ハ幼稚園ニテ日々勉強スルニ用ユル机ト椅子ナリ」というように、関連する題目が記されている。それとともに、「時節柄月見及ビ花見ノ汽車ヲ作ラシム其他ハ随意」というように、季節にあわせた題目も取り上げられている。

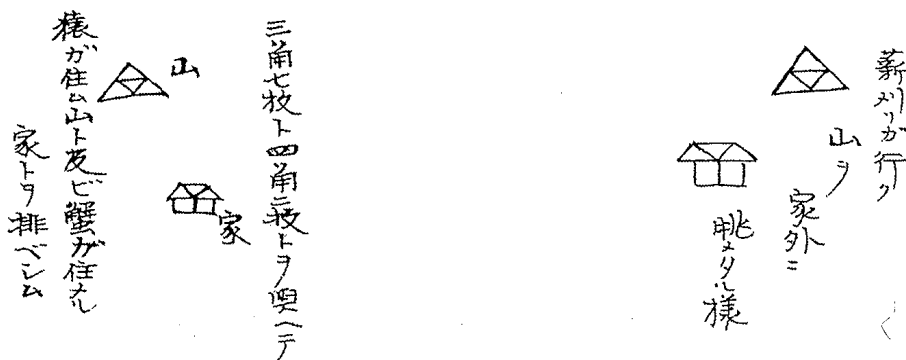
次に「箸排」であるが、明治33年度には「薙刀」「手桶」「本箱」「包丁」「矢」「旗」「階段」「蒸気船」「コップ」「火鉢」「三寶」「弁当箱」「独楽」「笠」「机」「刀」等の題目が、取り上げられている。ここでも「説話」と関係した題目が

取り上げられていて、「本箱」のところでは、「牛若丸寺ニ入りテ常ニ経ヲ習ヒシトキニカタツケオキタル本箱ヲ排ベシム」という説明がつけられている。

明治34年度には「環箸排」となっていて、「梅花」「桶」「池ト魚」「野薄」「植木鉢」「石碑」「野原ノ景色」「稲田ノ鳴子」「田舎ノ家」「帽子」「大菊」等があげられている。ここでも「説話」と関連した題目が取り上げられていて、前年度と同様、説明がつけられている場合も多い。例えば、「物臭太郎ガ常ニ空想ニ画キヲリシ池ト魚」という具合である。

「板排」は、両年度とも回数が少ない。明治33年度には「随意」や「復習」を除くと13日分であるがそのうち4日分は「美麗式」である。具体的題目としては、「橋」「燈籠」「家」「風車」「椅子」「蒸気船」「城」等である。ここでも「説話」に関係した題目と、そうでないものが見られる。「俵藤太ノ話」のところには、「俵藤太ノ瀬田ノ橋ヲ通りタル其橋ノ下ニ舟ノ浮ビ居ル所ヲ排ベシム板ハ四角九枚ニ三角七枚ヲ与フ」と記されている。だが、「風車」のように「説話」と関連のないものもある。

明治34年度は、10日分しか記入されていないが、「随意」は1回のみなので、9日分の題目が上げられている。2日分は「美麗式」である。「山家」「家ノ門」「船」「花」「山ト道」等が、行なわれるようになっている。ここでも「説話」での話に関連した題目がみられる。「猿蟹合戦」の間には、「三角七枚ト四角二枚トヲ与ヘテ猿ガ住ム山ト及ビ蟹ガ住メル家トヲ排ベシム」ことが取り上げられているし、「物臭太郎ガ都ニ上リテ奉公セシ家ノ門」という説明も見られる。「説話」に関連した題目とはいうものの、説明がそうになっているだけで、例えば「板排」で、「猿蟹合戦」の「猿ノ山」や「蟹ノ家」と、「人ヲ助ケシ熊ノ話」で出てくる山や家は、以下の図からわかるように同じである。



4. 作業として行なわれた手技の内容

(1) 「二ノ組」の場合

まず「摺紙」であるが、明治32年度には73日分の記入があり、そのうち55日分には具体的な題目が記されている。「二双船」「蓮ノ花」「舟」「鉢」「菊皿」「ほかけ舟」「三寶」「飾三寶」「かめ」「かぶと」「鯉」「駕籠」「蝶」「水鳥」「豚」「鳥」「家」「鶴」「風車」「箱」「襦袢」「馬」「くつ」「提灯」「屏風」「ふくら雀」「つばめ」「人」「花」「美麗式」「柿」等、多くの題目が記されている。何回か取り上げられている題目もある。これらの題目は、「説話」での話に出てくるものもあれば、特に関係のないものもある。「金太郎ノ復習」の日に「かぶと」、「燕ト鯉幟」の日に「鯉」、「舌切雀」の話の間に「ふくら雀」という時もある。また、「大江山」の話の間に、女中が出てくるところで、「女中ノ洗濯セシ襦袢ヲ摺マシム」と説明されていて、「説話」とつなげようとする様子が見える。「風車」の「摺紙」をする翌日の「説話」が「風ニ就キテ話ス」となっていて、関連させようとしていることがわかる。だが、「説話」が「桃太郎」の時に「菊皿」、「花咲翁」で「蓮ノ花」というように、関連がない場合もある。

明治33年度には、記入されている日数が半分以下に減っている上、「随意」「工夫」という日や「前日ノ残り」という日もあって、具体的題目が記されているのは、15日分のみである。「馬」「狐面」「家」「舟」「箱」「菊皿」「門」「雁」「鶯」等が、行なわれるようになっている。ここでは、「説話」に関係する題目が取り上げられていることが多い。「乗馬ト騾馬ノ話」の日に「馬」、「食ヲ過シタ狐ノ話」の間に「狐」、御伽噺や日本昔話で「雁」が出てくる時は「雁」を、「鶯」が出てくる時は「鶯」をたたむようになっている。

次に「貼紙」はどうであろうか。明治32年度には34日分のうち32日分に具体的題目が記されている。「風車」「白」「キ子」「鉢」「桃」「舟」「かぶと」「鳥居」「菊水」「燈籠」「鳥」「水桶ニ鉢」「門」「杯ト徳利」「傘」「葛籠」「膳ニ碗」「鍬」「茄子」「兎」「本ト筆」「柿」「壺」「美麗式」等、多くの題目が記入されている。ここでは、「説話」で取り上げられている話に関連した題目が多い。例えば、「桃太郎」の話の間に、月曜日の「貼紙」で3週連続で、「川上ヨリ流れ来ル桃ナリ」「前ハ桃ヲナシタル故ニ今度ハ葉ヲ貼ラシム」「桃太郎の乗る舟を貼らしむ」

となっている。「金太郎」で「鉞」、「一寸法師」で「椀二刀」、「猿蟹合戦」で「柿」というようになっている。

明治33年度には、「貼紙」と「剪紙」をあわせても15日分しかない。そのうち、図を見て判断できるものも含めて題目がわかるのは11日分である。「魚」「斧」「鉞」「龍宮塔」「美麗式」等が、題目として考えられている。ここでも、「説話」の中の話に関連した題目が登場する。「労働者ト白髪ノ老人」（金の斧、銀の斧の話）のところでは「斧」を、「金太郎」のところでは「軍扇」や「鉞」を貼るようになっている。

「画方」をみると、明治32年度には「梅ノ花」「金箱」「家」「門」「橋」「山」「船」「清水寺ノ塔」「オ膳」「火取虫」「竹ノ葉」「皿」「国旗」「壺」「鉢」「眼鏡」「刀」「箱」「杖」「むち」「鳥居」「臼」「帽子」等、多くの題目が記されている。これらの題目は、「説話」に関連したものが多い。「桃太郎」には「征伐ニ行ク時ニ用フル弓」、「金太郎」には「金太郎ノ大木ヲ切りテカケタル橋ナリ」と、説明されている。「川ノ庶物」のところでは、前後に「桃太郎ノ復習」をしているので、「婆サンノ洗濯ニ行キタル川ニ住ミ居ル魚ヲ画カシム」という説明になっている。

明治33年度には、「山」「家」「斧」「柿ノ樹」「橋」「土俵」「軍扇及ビ鉞」「太刀」「菊ノ花」「祝ノ餅」「伏セ籠ト食入レ」「ネブリコ及ビ手球」「雁の居シ芦」等の題目が記されている。この年度の保育案では、「画方」で具体的な題目が最も多くあげられている。ここでも、「金太郎」のところでは、「土俵」や「軍扇及ビ鉞」というように、「説話」の話と関連した題目が見られる。

「織紙」は、明治32年度には36日分に記入されていたが、「随意」「復習」が9日分、前の残りをやったのが13日分あり、題目が具体的に記入されているのは14日分だけである。「一マツ」「橋」「門」「鳥居」「納屋」「美麗式」等である。ここでは、「説話」で取り上げられている話に関連した題目もあれば、関連しない題目もある。

明治33年度には、26日分に記入されていて、具体的題目が書かれていたり、図が描かれているのは15日分である。前年度より「随意」や残ったものをやることが少なくなっているが、「一マツ」とかかかれている日が6日分もある。他に

は「二マツ」「美麗式」等である。ここでは、「説話」で取り上げられている話との関連は少ない。

「豆細工」は、明治32年度には19日分のうち17日分に題目が記入されているが、図が描かれている。「帽子掛」「盆」「臼」「金箱」「舟」「橋」「家」「植木鉢」「門」「鳥居」「鳥籠」「皿」等が、行なわれるようになっている。これらの題目は、「説話」での話に関連したものが多い。「金箱」は「花咲爺」のところで、殿様から貰ったものであるし、「橋」は「金太郎」のところで出てくる。

明治33年度は、前年度より記入されている日数は増えるが、「随意」も増えるので、題目がわかるのが16日分である。「竹馬」「山」「家」「斧」「鳥居」「犬」「雁」等である。図を見ると、「水呑」や「魚」も作るようになっている。ここでも、「二人ノ旅行者ト斧ノ話」のところで「斧」というように、「説話」での話に関連した題目がみられる。

「縫取」は、明治33年度は回数が少ないので、32年度のみ取り上げる。「線」「円」「桃」「舟」「家」「鳥籠」「肘突」「壺」「コップ」「矢」「オ膳」「鳥居」「帽子」「馬ノくら」等の題目があげられているが、「前ノ残り」「前週ノ残り」という日が多く、1回では終わらず難しかったであろうことがうかがえる。具体的な題目には、「説話」での話との関連が見られる。

(2) 「一ノ組」の場合

まず「摺紙」からみていく。明治33年度には、43日分記入されているが、題目が記されているのは27日分である。「かぶと」「美麗式」「額」「燕」「緋鯉」「蛙」「馬」「籠」「家」「箱」「門」「帽子」「くつ」「ちり取」「コウヒ茶碗」「蟹」「杯」等が、題目として記されている。「説話」で「燕ト鯉幟ノ話」の時に「燕」を、「猿蟹合戦」の時に「蟹」をたたむようになっている、「説話」と関係あるものが取り上げられていることがわかる。

明治34年度は、22日分記入されていて、そのうちの15日分は作る題目が書かれている。「家」「袴」「蜻蛉」「盃」「菊皿」「馬」「船」「蟬」「美麗式」「狐」「頭巾」等があげられている。「愚ナル狐ノ話」のところで「狐ノ面」というように、「説話」と関係する題目の時もあるが、「時折ガラ菊皿ヲ摺マシム」という

ように季節に合わせたものの時もある。

次に「貼紙」であるが、記入されている日数が「摺紙」と比べると半減している。明治33年度には、21日分記入されていて、題目がわかる。「橋」「燈籠」「蒸汽」「魚」「美麗式」「俵」「家」「徳利ト杯」「箱」「柿」等が、取り上げられている。これらの題目は、「説話」と関連させてあるものが多い。「燕ト鯉幟ノ話」のところで、「魚ヲ貼ラシム」「鯉ヲ入ルル鉢ヲ貼ラシム」ことが行なわれるようになっていたり、「説話」の「話中ニ藪ト云フアリ故ニ竹ヲ貼ラシム」となっている。

明治34年度は、11日分に記入されていて、その全部の題目がわかる。ここでは「猿ノ好ミテ常ニ食スル果実」として柿と栗を貼ることと、「梅花」「桜花」以外は「美麗式」である。

「画方」は、明治33年度には22日分に記入されているが、「随意」等を除いた18日分の題目がわかる。「カサ」「月夜」「浜辺ニ松」「魚」「弓」「舟」「三階ノ家」「山ニ木ノアル所」「三ツ輪」「段」「筆ト本」「六角ノ形ノモノ」「太鼓」「くり」等の題目がみられる。「源平戦ノ時常盤御前所々逃ゲ回ル時ニ雪ガ降り居ル故ニカウムリタルカサナリ」と説明されていたり、「姥捨山」の話の時に「山上ニ月ノ出ヅル所ヲ画カシム」と記されていることから、やはり「説話」に関連させていることがわかる。

明治34年度には、27日分の記入があり、26日分の題目がわかる。「帽子ト杖」「餅ツキノ道具」「鏡餅」「柿ト栗」「旗」「梅ノ実」「月稲」「金入レト卵子」「松」「雪中ノ山」「連山日ノ出」「火鉢」「蜜柑トキンカン」「亀」「梅ノ花」「家」「蔵ノ窓」等、多くの題目が記されている。「説話」で「兵士ノ務」「看護婦ノ務」が取り上げられている時には、「軍旗及ビ赤十字社ノ旗トヲ画シム」となっている。「物臭太郎」の話の間には、「物臭太郎ガ人ヨリモラヒ受ケシ団子ト及ビ其器」や「物臭太郎ガ毎朝使用セル塵取りト掃木」が行なわれるようになっている。「友達ニ親切ナリシ子供」のところでは、話に登場する「阿花ガ学校ニテ先生ニ習ヒ居ル所ノ書籍ナリ」というように、「説話」と関連させた説明がなされている。

「織紙」はどうであろうか。明治33年度には22日分に記入されているが、「随

意」と「前週ノ残」等を除くと、具体的な題目がわかるのは11日分である。「美麗式」「ニマツ」「一マツトニマツノ交互」で過半数を占める。その他は、「五条ノ橋ノ下ニ舟浮ブナリ」「家」「蒸汽船」「山ニ霞」「机」等で、「説話」に関係した題目もある。

明治34年度には、17日分に記入されているが、「随意」や「先週ノ残り」を除いた12日分は題目や図が記されている。「一松ト二松トノ交り」「二松」等以外に、具体物の記入はない。図もすべて具体物ではない。

「豆細工」は、両年度とも取り上げられている日数が少ない。明治33年度には、21日分に記入され「随意」を除いた15日分の題目がわかる。「扇子」「旗」「矢」「車」「犬」「三寶ノ如キ台」「箱」「樵夫ノ家」「喇叭」「机」「天秤」「衝立」「籠」等である。「説話」の「牛若丸」の中で「扇子ニ就キ其効用材料種類何頃用フルヤ等ニ就キ話ス」日に、「扇子」が取り上げられるというように、関連づけられている場合が多い。

明治34年度には、15日分記入されているが半分以上が「随意」であるので、題目がわかるのは7日分しかない。「蛸籠」「切り実」「船」「魚」等で、「説話」での話に出てくるものもあれば、そうでないものもある。

「縫取」は明治33年度では、23日分に記入されていて、「前ノ残り」を除く17日分の題目がわかる。「扇子」「手桶」「マナイタ」「オ膳」「美麗式」「刀」「軍敗」「家」「羽子板ト羽子」「鏡餅」「行燈」「石臼」等の題目があげられている。これらの題目は、「説話」での話に関連づけられている場合が多い。「たらい」が出てくる話の時に、「たらいト同種類ノ手桶ヲ縫ハシム」と説明されていて、何とか関連づけようとしていることがうかがえる。

明治34年度には、「縫取」の回数は激減している。6日分のみで、「ツヅキ」があるので、「団扇」と「柿」が記入され、図から「家」「鉤型模様」が行なわれるようになっていることがわかるのみである。「団扇」のところでは、「説話」で蟻が出てくるので、蟻が生活するのに最も適切な夏に人が用いるものという説明をしているが、「説話」とは直接関係がない。

明治33年度に、回数は少ないが7月から10月にかけて、「粘土細工」が取り上げられている。「球」「正方体」「盆」「火鉢ニ似タル正方体」、最後が「随意」で

ある。ここでは「説話」との関連はみられない。

5. 柳池幼稚園と城巽幼稚園の比較

(1) 取り上げられていること

本論集第55号で見てきたように、城巽幼稚園の場合は、「二の組」（さまざまな書き方がされているが、ここでは、この組だと思われるものも含めて、この書き方をを用いる）では、明治20年代から30年代に、どの保育案等でも取り上げられていたのは、名称は異なるが「積木」及び「箸排」「板排」「剪纸・貼紙」「豆細工」である。明治29年以降は、「摺紙」「画方」もあげられている。「縫取」や「織紙」は、取り上げられている場合も、いない場合もある。明治29年と明治31年は、「織紙」はなくて「縫取」があり8種類で、明治36年には「織紙」も入って9種類である。明治38年の「保育細目」では、「縫取」がなくなり8種類になっている。

柳池幼稚園では、明治32年度に9種類だったのが、翌年度には「粘土細工」も行なわれるようになってきている。「縫取」は1回で終わらず、残りを次の時にやることが多く難しかったので、「二ノ組」では取り上げられなくなっていったと思われる。城巽幼稚園では明治36年まではあり、柳池幼稚園では明治33年度まではあったが激減しているのので、明治30年代の半ばに変化したといえよう。

城巽幼稚園の「一の組」（「二の組」と同様）では、明治20年代には上述の9種類に「繋方」が加えられて10種類である。明治38年には「繋方」がなくなり、「粘土細工」が加えられている。柳池幼稚園では、明治33年度には「粘土細工」「つなぎ方」が、回数は少ないものの保育案の中で取り上げられていた。だが、明治34年度には後者はなくなっている。「粘土細工」は、取り上げるとよいという議論もなされるが、準備の手間もあり、広がっていなかった。

どのようなことが取り上げられていたかに関しては、城巽幼稚園と柳池幼稚園では、時間的なずれは若干あるものの、大きな違いはみられないといってい

（2）恩物

まず「積木」であるが、城巽幼稚園の場合は「二の組」で第3、第4恩物が用いられ、明治38年の「保育細目」ではそれに加えて第6恩物に入っている長方体を横半分にした形が用いられている。柳池幼稚園では、明治32、33年度とも第3、第4恩物と第6恩物の長方体を横半分にした形が用いられている。ただし、一箱全部を使うのではなく、そのうちのいくつかを適宜必要に応じて用いるようになっている。明治33年度には、はじめは第3恩物のみでかなり簡単な形を積むようになっている。

城巽幼稚園の「一の組」では、第3から第6恩物までが用いられていたが、柳池幼稚園の「一ノ組」でも第5、第6恩物まで使用されている。全部を使うわけではなくて、その時々に応じて必要な数だけ用いるようになっている。用いる数に関しては、図を見て判断しているので正確な数ではないが、明治20年代の方が多いいえそうである。

題目では、「鳥居」「橋」「井戸」「門」等が両園とも共通に見られる。柳池幼稚園の「一ノ組」の「三階家」は、城巽幼稚園では「一の組」の場合も「二の組」の場合もある。

次に「板排」であるが、城巽幼稚園、柳池幼稚園とも、正方形と直角二等辺三角形は、どの年度でもどの組でも用いられている。城巽幼稚園では、直角不等辺三角形が「二の組」に出てくる場合もあったが、柳池幼稚園の「二ノ組」ではみられない。城巽幼稚園の「一の組」では、鈍角二等辺三角形や、正三角形もあげられている。柳池幼稚園では、図を見ると直角不等辺三角形や正三角形も用いられているように思われるが、鈍角二等辺三角形は見当たらない。用いる板の枚数は、「二の組」では、城巽幼稚園の明治20年代の「草稿」で5、6枚から18枚くらい、明治38年の「保育細目」で12枚となっている。柳池幼稚園では、明治32年度には13枚から16枚、翌33年度には8枚から11枚くらいと減っている。「一の組」では、明治20年代には十数枚から二十数枚であったのが明治38年には16枚で作れるものを取り上げられている。柳池幼稚園のほうは、明治33年度に8枚から16枚、翌34年度には16枚で作れるものがあがっている。柳池幼稚園の明治32年度の「二ノ組」は板の枚数が多めであるが、他は両園同様と

いえよう。題目は、両園の同年齢の組で共通のものは、意外に少ない。「燈籠」や「橋」、「風車」くらいである。「美麗式」や抽象的な「紋形」は、柳池幼稚園の「二ノ組」では少ない。

「箸排」「環排」はどうであろうか。城巽幼稚園では、明治24年から箸と環を一緒に用いている。用いられている種類や数は、明治20年代より30年代の方が減る傾向にある。柳池幼稚園の「二ノ組」では、明治32年度は合わせて10まで、翌33年度は4から13であり、この数は城巽幼稚園より少なめである。「一ノ組」では、明治33年度には3から13で10くらいの時が多く、翌34年度には6から24である。ただし、24の時には「図ノ如キ限りニアラズ」となっていて、必ずしもその通りにならなくてもよいとされている。この明治34年度の「一ノ組」は、14、16、18と比較的多く使うようになっている。題目としては、「家」「門」「植木鉢」等が共通してみられる。

(3) 作業

まず「摺紙」に関しては、城巽幼稚園では明治29年以降「二の組」でも取り上げられているが、柳池幼稚園の明治32年度ほど多くの題目は記されていない。明治29、31、36年の保育案等で記されている題目の多くは、明治32年度の柳池幼稚園でも取り上げられている。城巽幼稚園に出てくる「狐面」は、柳池幼稚園の明治33年度では出てくるが、明治32年度には取り上げられていない。

城巽、柳池両園とも、「かぶと」や「狐面」、「菊皿」等のように、「二の組」「一の組」のどちらでも取り上げられているものもある。「ちりとり」は両園とも「一の組」で出てくる。「フクラ雀」や「襦袢」は、城巽幼稚園では、どちらの組でも出てくるが、柳池幼稚園では「二ノ組」のみである。その逆に、柳池幼稚園では両方の組に出てくるが、城巽幼稚園では「二の組」のみという題目もある。こうした具体物の他に、「美麗式」も、両幼稚園で取り上げられている。取り上げられる組に若干の違いはあるものの、「摺紙」で行なわれていたことは似ているといえよう。これらの題目をみると、教えながら折り進めていったとしても、幼児には容易にできなかつた難しいものもあつたと思われる。

次に「貼紙」であるが、城巽幼稚園では明治20年代には「剪紙」という言い

方がされているが、内容的には「貼紙」と同じである。この細工では、「美麗式」が多く取り上げられている。具体物の題目もあげられているが、半分以上が「美麗式」になっている保育案等もある。用いられている形は、主に四角形、三角形であるが、円形を用いるようになっている保育案もある。柳池幼稚園の場合は、明治32年度の「二ノ組」では、多くの具体的な題目が記されていて、「美麗式」が多いわけではない。翌年度には回数が半減しているが、ここでも特に「美麗式」が多いわけではない。「一ノ組」では、明治33年度には21日分、翌34年度には11日分しか記入されていない。「二ノ組」も「一ノ組」も、「説話」に出てくる話に関連させた題目が多いが、明治34年度の「一ノ組」では「美麗式」が多くて、7割を占める。この割合は、城巽幼稚園より高い。

「画方」は、城巽幼稚園では「一の組」のみで取り上げている保育案等もあったが、柳池幼稚園では明治32、33年度とも「二ノ組」でも取り上げられていた。題目に関しては、城巽幼稚園の場合は、「自由」「随意」が多く組まれていた。「随意」や「工夫」で過半数を占めている保育案もあるが、柳池幼稚園では、それほど多くはない。

「織紙」は、城巽幼稚園の「二の組」では、明治24年と明治36年、明治38年に取り上げられている。「一の組」では、どの年度の保育案等でも取り上げられている。柳池幼稚園では、「一ノ組」「二ノ組」とも取り上げられている。題目としては「一マツ」「二マツ」「美麗式」等が共通である。

「豆細工」では、城巽幼稚園の場合は「二の組」は豆2ひご1の「旗」から始める保育案等があり、「一の組」の方が使用する豆やひごの数は当然のことながら多くなっている。柳池幼稚園の場合は、豆やひごの数は「竹一本豆七ツ」で工夫というように書かれているところはあるが、具体的な題目のところでは図をみて判断するしかない。「一ノ組」の「蛍籠」のように多数の豆とひごを用いるものもあげられている。題目としては、「二の組」「二ノ組」では「橋」「鳥居」「竹馬」等が両園に共通に見られる。「一の組」「一ノ組」では、「喇叭」「籠」等が共通である。残された図をみると、「一の組」「一ノ組」の方が立体的なものや、ひごを曲げて曲線のある形を作るものが多く取り上げられている。本論集第55号でも指摘したように、喜んでやってはいたが、小さな豆にひごを何本

も刺すのは難しくて、豆がつぶれてしまい、うまくできなかったこともあった。

「縫取」に関しては、城巽幼稚園では「二の組」で取り上げられているのは明治29年以降で、このときは6月から取り組むようになっていた。「一の組」でも「前週ノ残り」ということがあり、難しくて1回では終わらなかったことがうかがえる。城巽幼稚園の「二の組」では、縫い方の練習や「美麗式」が多く、具体的な題目は少なかった。「一の組」でも、具体物も取り上げられているが、やはり「美麗式」やいわゆる「紋形」が多い。柳池幼稚園の場合は、「二ノ組」の明治32年度は「線」や「円」のような練習もあるが、「説話」に関連させた題目があげられている。「前ノ残り」が多く、ここでも難しくて1回では終わらなかったことがわかる。「一ノ組」でも「説話」と関連づけた題目が多く、「美麗式」もあるものの多くはない。

(3) 「自由」「随意」「工夫」の占める割合

本論集第55号で明らかにしたように、城巽幼稚園では明治20年代から「自由」や「随意」がかなり広く行なわれていた。そこでは、『日本幼児保育史』に紹介されている柳池幼稚園の「随意」の割合とも比較した。だが、京都市学校歴史博物館に残されていた柳池幼稚園の保育案とは違いがあることと、同じ年度の保育案でも、取り上げられている日数に違いがみられるため、ここでは、直接保育案から数え直した数値を用いて、比較検討する。

柳池幼稚園では、明治32年度より33年度、34年度の方が全体に占める「随意」等の割合が高くなっている。明治33年度は「二ノ組」と「一ノ組」があるが、大きな違いはみられない。『日本幼児保育史』に紹介されている明治32年度の「三之組」では、「積木」「板排」「繫方」で「随意」が20%を超えていたが、「摺紙」や「画方」では0であったので、手技全体に占める「随意」の割合は、同年度の「二ノ組」と違いはない。城巽幼稚園の明治31、36年の「随意」「工夫」の割合と比べると、柳池幼稚園の明治33、34年度でも、半分ほどしかない。

城巽幼稚園で「自由」「随意」の割合が高かったのは、「画方」や「積木」であったが、柳池幼稚園では、「板排」や「積木」では高めであるが、「画方」は高くない。手技の種類ごとに少し詳しく見ていきたい。

まず「積木」であるが、柳池幼稚園では「二ノ組」は明治32、33年度に35、36日分に記入されていて、そのうち「随意」はどちらも5日である。明治33年度には「工夫」が2日あるのでそれを合わせても、14～19%で、城巽幼稚園の明治20年代及び明治36年の保育案と比べると低くなっている。「一ノ組」では明治33年度には34日分のうち「随意」は7日、さらに題目が決められていて「随意」という日が2日ある。明治34年度は、24日分のうち「随意」が6日、「随意ニ復習」が2日、題目が決まっていて「随意」が1日ある。題目が決まっていて「随意」というのは、作りたいものを作ることとは異なるが、手本通りにやることは求められないので、形は自由にできた。これを「随意」に入れるかどうかは判断が分かれるところであるが、城巽幼稚園の明治20年代の保育案等では14～33%であったので、明治34年度の「一ノ組」では、「随意」の割合は高めだといえよう。

「板排」では、柳池幼稚園の場合は、「二ノ組」の方が「一ノ組」より「随意」の割合が高い。特に、明治33年度の「二ノ組」は、40%を超えている。低かったのが、明治34年度の「一ノ組」で、10%であった。城巽幼稚園の明治31年の保育案では「随意」「工夫」が40%を超え、同36年の保育案でも三分の一を占めていたので、「二の組」でも幼児が自由に並べることが広がっていたことがわかる。

「箸排」「環排」「環箸排」では、柳池幼稚園の場合は、「随意」の割合は低い。城巽幼稚園では、年度、組により0から三分の一を超えるまで、違いが大きい。

次に作業に当たる「画方」であるが、これは城巽幼稚園と柳池幼稚園で大きな違いが見られる。柳池幼稚園では、「二ノ組」は明治32、33年度ともそれぞれ4日、2日しか「随意」「工夫」がない。「画方」が記入されていたのは40日分と30日分であったので、10%以下である。「一ノ組」でも、明治33年度は22日分のうちの3日、翌34年度は27日分のうちの1日のみである。城巽幼稚園では、低かった明治29年の保育案でも12%ほど「自由」があったので、柳池幼稚園では、低いといえる。

「豆細工」は、柳池幼稚園の場合は、明治32年度の「二ノ組」以外は、「随意」の割合は高い。特に明治34年の「一ノ組」は、取り上げられている日数は多く

はないが、半分以上が「随意」である。城巽幼稚園では、明治36年の保育案で約三分の一が「随意」であったことと比べても、組の違いはあるものの明治34年度の「随意」の割合は高いといえる。

組により違いがあるのは、はじめは使い方ややり方になれる必要があるものは「自由」「随意」が少ないが、特にその必要がなく積んだり並べたりできるものは年少から「自由」「随意」が多いためとも考えられる。柳池幼稚園、城巽幼稚園とも、年度により異なる。特に城巽幼稚園は、明治20年代に一旦増えてから減って、明治30年代に大幅に増える。幼児の「自由」「随意」をどのくらいの頻度で取り入れるのか、具体的な題目ややり方が決まっていることとどのような形で組み合わせていくのか、やってみて検討し、計画を変えているといっても良いであろう。

明治37年に京都市の保育会で調査してまとめられた「保育細目」は、この当時、各幼稚園で参考にされていた。「積木」「板排」「箸環排」「豆細工」の題目と図がかかっているが、題目の数は一番多い「二の組」の「積木」で19である。一年間に40週あるとしても、その半分でしかない。同じ題目を復習したり、「自由」「随意」で幼児たちが自ら作りたいものを作ったりするように考えられていたことがうかがえる。最も少ないのは「一の組」の「板排」で、8題目である。「一の組」の「板排」は隔週になっているので、一年に20回としても、やはり「復習」や「自由」「随意」をかなりの程度取り入れるように考えられていたと思われる。この「保育細目」を元にしながら、適宜「復習」や「随意」を取り入れていくというのが、当時の共通理解だったといえよう。

おわりに

明治20年代の終りから幼児たちの工夫が取り入れられ、明治30年代に入ると、拙稿「我国幼稚園における手技の歴史—その6—」の中で指摘したように、「随意」の頻度が高く40%近くを占める保育案も見られるようになっていた⁴⁾。柳池幼稚園の手技に占める「随意」の割合は、高いわけではない。それは、「説話」の中に出てくるものを手技でも取り上げようとしたことに関連していると思われる。城巽幼稚園の保育案では、柳池幼稚園のように何とかして「説

話」に関連付けようとするような説明は見られないので、より自由に「随意」を組み入れていたといえよう。柳池幼稚園の資料として、明治時代のものと思われる手技に関する図が残されているので、これと城巽幼稚園に残されていた「保育細目」との比較も含めて、今後さらに検討したい。

註

- 1) これらの資料に関しては、竹村佳子学芸員にお世話になりましたので、記して感謝いたします。
- 2) 日本保育学会『日本幼児保育史 第二巻』、フレーベル館、1968年、189～191頁。
- 3) 引用文の、ひらがな、カタカナの表記は原文のままである。
- 4) 『愛知県立大学児童教育学科論集』第28号、1995年、47頁。